

樋口直人編

『日本のエスニック・ビジネス』

評者：宮島 喬

近年、産業構造が変化し、製造業雇用の比率が低下しつつあり、外国人または移民の労働もサービス・セクターに移行しつつある。この分野では小規模な経営になればなるほど、雇用主、被雇用者の区別が曖昧になり、事業主も労働の場に立つ「自営業」の形をとりやすい。その主観的意識からは「ビジネス」意識がもたれることも多く、その意味で移民がビジネスに結び付けられやすくなっている。欧米諸都市でも食品・食材店、クリーニング店、タクシー、土産物店などは代表的なものだろう。日本では、以前から圧倒的存在として中華（国）料理店があり、焼肉店、パチンコ業などが想起されるが、それ以外はやや散在的との印象があった。研究書も少なかつただけに、本書が上梓されたことは注目される。その章立てを紹介しておく。

序章 樋口直人「日本のエスニック・ビジネスをめぐる見取り図」

第1章 韓載香「在日韓国・朝鮮人——ビジネスのダイナミズムと限界」

第2章 小林倫子「ニューカマー中国人——一般市場における多様な展開」

第3章 片岡博美「ブラジル人——揺れ動くエスニック・ビジネス」

間章 アンジェロ・イシ「エスニック・メデ

ィアの担い手たち——在日ブラジル系メ
ディアビジネスの興亡」

第4章 高畑幸・原めぐみ「フィリピン人——「主婦」となった女性たちのビジネス」

第5章 平澤文美「ベトナム人——外部市場志向のビジネス」

第6章 福田友子「パキスタン人——可視的マイノリティの社会的上昇」

終章 樋口直人「鶴見で起業する——京浜工業地帯の南米系電気工事者たち」

1

なぜエスニック・ビジネス研究か。外国人・移民というと、「労働者」すなわち被雇用者という捉え方が圧倒的に多かったのに対し、実態は変わりつつあるという事実認識からの出発がありえよう。また、多分に消費文化としてであれ、料理、ファッション、音楽などに及ぶエスニック文化の多様な展開への関心からのアプローチがありえよう。編者樋口氏は、別の共著で、「日系人労働者は非正規就労からいかにして脱出するか」として彼らの起業に考察を加えている⁽¹⁾。とするなら、外国人移民の下層かつ不安定な労働からの脱出の道として自営起業化を戦略的に位置づけ研究対象としたこと、これがメインの関心なのであろうと推測される。とすれば次のようなコメントが可能だろう。おそらく「脱出」の唯一の道が自営業参入のではなく、雇用条件を支配する派遣業者等への交渉・闘争、あるいは日本からの帰国もありうると思われ、また「脱出」が行為者の主観的動機そのものか、それとも研究者の仮説的な解釈なのかは検討を要し、さらに脱出に成功するケースは限られているのではないかと。

関連で、編者は序章で、「差別・排除がエスニック・ビジネスを生み出すという排除仮説」

について、これはエスニック・ビジネスに従事する要因を解明するものではないとしているが、果たして一般化できるか。それは本書中の考察とも矛盾しないだろうか。たとえば1章では韓は、在日韓国・朝鮮人の被雇用者率の低さは、労働市場における差別と深く関係していると認めている(38頁)。ただしその差別は、在日のダイナミズムを奪うものではなく、自営業への参入は彼らの「主体的対応」を示すものだとしている。とすれば、「排除仮説」は、人的資本、社会資本等を重視する戦略的・動的アプローチを採ることと必ずしも矛盾しないというべきだろう。殊更に「排除仮説」を退ける必要はないのではないかというのが、率直な感想である。章立てからも推測できるように、多様な状況の民族アクターが扱われているだけに、その起業の事情、動機付けは共通にくくれない恐れがあり、その点は柔軟であるほうがよいと思う。

ともあれ、動的アプローチを重視する以上、人的資本、社会資本、機会構造という三つの分析ツールからの接近は、これに適合しているといえる。この観点の接近の努力は全章を通してとられ、これは本書の特徴、メリットをなす。そしてこのアプローチは当然、各民族アクターの視点に立つ行為論的な考察となるが、反面、構造論的な分析では弱さをみせることになる。たとえば、企業の中での経営と従業員の権力関係、賃金、利潤配分、労働法規の遵守と逸脱、等々。従来の欧米のエスニック・ビジネス論はこうした面にも注意を向け、限られた資本と安価な商品提供のため、法定に反する長時間、低賃金労働が押し付けられる「^{スウェットショップ}苦汗工場」の存在などを指摘してきたが、本書では比較的論及が少ない。さらに、本書で避けられているものに、エスニック・ビジネスとは何かという問いへの回答がある。このため本書を読みながらイメー

ジの拡散は避けられなかった。その主な推進者がエスニック・マイノリティであるような事業をさしてこう呼ぶ、というのが本書の示す最小の括りだろうと判断されるが、では、それは事業主か、名義人か、実際の作業員か、資本の提供者か。多くのベトナム・レストランのように日本人が資金提供し、事業主で、料理人まで日本人である場合(5章)はどうなのか。①扱う財、②事業主、③資金提供者、④従業員構成、⑤顧客のエスニシティ、等々を考慮して、たとえばアメリカではエスニック・ビジネスを成り立たせる単一ではない「人種エスニック編成」が問題にされてきた⁽²⁾。本書ではそうした問題の捉え方は中心にはないようで、わずかに中国人の起業に関連して若干これが論じられている(95頁)。もし経営スタッフ、従業員の過半を日本人が占める企業があれば、エスニック財・サービスを扱っていても、ずいぶん性質の異なる事業体となろう。

ただし、定義などにこだわらず、ゆるやかな視点からマイノリティの行為者たちの経済活動を掬いあげ、分析し、どのような事実が明らかになるかを問うという研究にも意義があることを否定するものではない。

2

豊かな内容をもつ各章だが、紙数の関係で簡単にしか触れられないのは残念である。

在日韓国・朝鮮人の参入し担った産業分野が、戦後、ゴム、繊維など地域性をおびたものから「脱地域」「脱製造業」を経てパチンコホール、飲食業など第三次産業へ、それに伴い金融機関が成立する過程を追った第1章の考察は、きわめてダイナミックで示唆に富む。多くを教えられた。だが、戦後すでに70年近くを経、コリアンの経済活動は日本社会と関わりが深くなり、たとえば民族系企業で都市銀行と取

引するところは少なくないとするれば、前者の人的構成、資本の構成、顧客関係は複合化も進んでいるだろうし、そうした側面はもっと知りたかった。

第2章のニューカマー中国人については、起業に焦点が合わされ、人的資本、社会資本、機会構造における他集団に比べての有利さが強調される。けれども飲食店ならまだしも、著者小林氏の調査したソフトウェア開発などになると、成功物語ばかりとはいえず、能力ある同国人の団結のみでは不十分で、社会関係資本として非エスニックな社会関係が必要になる。優秀な日本人従業員を雇用できるだけの資本金と規模を備えた企業はまだ少ない。企業が発展をめざすなら、単一エスニック性を弱めなければならないという要請があるのではないか。

順序は飛び、5章に触れると、ベトナム人のビジネスは、比較的滞在歴の長いニューカマーでも種々難しさもみせている。難民として来日後、斡旋で就いたのは中小製造業労働者が比較的多く、この点アメリカやフランスにおけるベトナム系より恵まれない地位にある。ビジネスに活路を求める場合、代表的なものは料理店であるが、平澤氏はその両面性を的確に指摘している。在留者数に比しベトナム料理店数は多く、しかも顧客の大半が日本人であるからビジネスとして成功しているといえなくはない。けれどもオーナーの大半が日本人であることは、資本金の問題、宣伝やサービスのノウハウの問題があることを意味するのだろう。くわえて料理人もベトナム人でない所がかなりある。エスニック・ビジネスとは何かという問題を考えさせるケースである。

パキスタン人のビジネスとしての中古車貿易(6章)は、ユニークである。業種、商品は民族となら関係ないし、その人的資本でも特に有利さがあるとはいえない。むしろ単身男性移

民ゆえ日本人女性と結婚するケースが多いといういわば偶然的要因が、結果的に社会関係資本(社会信用、文書能力、保証人機能をもつ同伴起業者)の獲得という大きなアドバンテージを生む。もちろんそれ以外の条件もあるが、起業を成り立たせる要素としてのこのような社会的な要因連関への着目はきわめて興味深い。と同時に、ここから、エスニック・ビジネスとはホスト国国民から重要な媒介者、協力者をえずに発展しうるのか、という大きな問いに逢着するのである。

さて、ブラジル人とフィリピン人におけるビジネス(3, 間, 4, 終章)は、小規模性、市場基盤の脆弱性が特徴で、業種や扱う財・サービスも同じ民族の需要の範囲をなかなか超えられないでいる。両集団とも在住人口は小さくはないが、ビジネスを成り立たせるには狭小で、そのエスニック財は日本人消費者を広く獲得できない。人的・社会的資本では、ビジネススキルを来日前のブラジルで獲得した者はいても、日本では工場労働経験者であり、かつ日本語の能力も不十分なレベルにある。また、同国人を対象とするブラジルの日系新聞三社が日本進出を断念したのは、結局、日系人の滞日が不安定な短期出稼ぎに終わるだろうとみていたためだという(間章)。とすると、不安定な派遣労働・間接雇用からの脱出のためのビジネスという目論見は成功せずに終わるケースが多いようで(第3章)、先に触れた、起業による非正規雇用からの脱出という可能性も一部の例を除いて検証されているとはいいたい。

フィリピン人のケースでは、「主婦」女性たちの企ては、ビジネスと呼ぶよりは副業ないしアルバイトと呼ぶべきもののように思われる。とはいえ、たとえ結婚しても母国の家族への仕送りがあり、夫に頼らず自分でも稼ぎたいという思い、また既婚女性も社会的自己実現をめざ

すのは当然とする欧米的な観念からそれが試みられている点は、ともに興味深い。そのなかで英語力を活かすという企ては、過去のアメリカ統治の遺産ではあれ、自らの資源の活用であり、自己実現の要素をもっている。

終章の扱う南米系電気工事業は、南米系のビジネスの数少ない成功例といえるかもしれないが、同時に限界例でもあろう。電設工事という全くノン・エスニックな業種が、少なくとも京浜の一地域でなぜ「移民企業ニッチ」になりえたか。戦略的投資、コロニアとの関係の利用、「沖縄」との縁の活用、南米人にも困難ではない電気工事士資格取得、特定の個人がもちえた機を見るに敏な商才、等々の組み合わせが働いたためだろう、と分析する。人的資本、社会関係資本、機会構造という仮説からの解釈が効果を発揮している例だろう。ただ成功企業が現れるのと裏腹に「多数の同胞を『商品』として安く売ること」(272頁)が進むとして示唆される低賃金構造については、いま少し分析してほしかった。

3

以上の8つの章の考察をたどってくると、改めて「エスニック・ビジネス」の語の指示するものの多様さに驚かされる。それだけに冒頭で触れたように、研究に際してさまざまな問題意識、視角設定、方法が成り立つわけで、評者なりの疑問も呈したが、この問題に関心を寄せる研究者の間に活発な生産的な議論が起ることを期待したい。

また、本書が意識的に重視し、適用しようとした人的資本・社会関係資本・機会構造の視点

は有効性を発揮していると評価したいが、たとえば人的資本について、章によっては「高いか、低いか」という次元だけで単純に論じられて終わっている。これら資本の、単純に等級パラメータ化できない質的多様性にいま少し考慮がめぐらされてもよいだろう。たとえば、5章のベトナム料理店における料理人の「ベトナム人か、日本人か」という選択では、どのような質の人的資本か、が逆説的ながら問われていて、このことを考えさせてくれる。

とはいえ、個別の各章はいずれも力作であり、できるかぎり実証的データを得て考察を行おうとする姿勢には、敬意を表したい。近年の日本の経験的エスニシティ研究のなかでも、本書が重要な位置を占めることはまちがいない。

最後に「ないものねだり」式コメントをすれば、民族ごとの章立てをとる以上、近年身近にも感じる、IT企業参入や増加するインド料理レストラン等を対象に、「インド亜大陸出身者・ネパール人」という一章があってもよかったのではないかと思う。東京の大久保や西葛西の街の変貌を思うにつけ、知りたい動きである。

- (1) 稲葉奈々子・樋口直人『日系人労働者は非正規就労からいかにして脱出するか』全労災協会、2010年。
- (2) 南川文里「アメリカにおける人種エスニック編成とアジア系移民」宮島喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』東京大学出版会、2002年などの指摘がある。

(樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社、2012年11月刊、v+286頁、定価2,800円+税)

(みやじま・たかし お茶の水女子大学名誉教授)